

The Iris Murdoch Newsletter of Japan



No. 3

December, 2001

不条理な幸運

植木研介

幸運に巡り合わせた。アイリス・マードックさんが、夫君のオックスフォード大学英文学の教授ジョン・ベイリー氏と、広島大学を訪問されたのである。1975年3月30日と、31日の両日のことであった。

わたくしは、その日まで研究室の助手で、翌4月1日から、瀬戸内海の真向い愛媛大学に転出することになっており、お二人を囲んでの行事の裏方を務めるのが助手としての最後の締めくくりになった。自分の机の後片付けなど知ったことかとはばかり、憶えていない。

裏方でありながらお二方とわたしの節目の時に語り合う機会にめぐり合えたこと。これはむしろ物理的な幸運である。だが精神的には、31日のマードックの講演会では録音を採る仕事をしながら、講筵に列することができ、内容から大きなヒントを得たことは意義深かった。

話のタイトルは 'The Role of Mythology in the Novels and Politics Today' である。当時広島大学の外国人教師をしており、現在は関西大学教授の、我が友、ピーター・メイキンが「ブリテイシュ・カウンシルが招いた学者のうちで、彼女のスピーチほど日本で好評だったものは無い。何故なら内容が理解できなかったからだ。」と、茶目っ気たっぷりに数年後わたしに語ったその講演である。

たしかに内容は難しかった。その年の夏からブリテイシュ・カウンシルの奨学生としてイギリス

に出かけることになっていたわたくしにはその英語に聞き取れない所が多々あった。聞き取れた所は、内容が互いに矛盾しているとか思えぬ点があり、この点を心のうちで考えているうちに話は無情にも先へと進んでいく。

でも、"demythologizing"、"crisis of liberalism"、"happiness"、"bourgeois ideas"、"mediator or mediating terms"、と言ったキーワード等はかなり耳に残りメモが取れた。あとは録音したテープをダビングして、何度聞きなおしたことだろうか。当時も何度もテープを回したが、いまでも時々耳を傾ける。

わたしはマードックの話の内容を援用し、わたしがそれまで考えてきたことを、それこそ、マードックの用いた語句「神話(有る概念)」と「脱神話化」という言葉を媒介語、イメージとして用いて組み立て直し補強をしていった。わたしのたどり着いた地点は書いても仕方ないのでこのままにしておく。

マードックの話は「毛沢東主席は、人間性(human nature)と言うのはブルジョワの作り上げた単なる概念にすぎない、と語った」とのディスコースから始まった。30分という時間の制約の中で、全世界をどう観るかを、政治、宗教、哲学、芸術、科学の分野における、脱神話化の歴史を語りつつ、かつ、東洋の思想、宗教とりわけ仏教、ヒンズー教と比較しながら、述べていくという、複雑で壮大な試みである。

もっとも、質問の時間を30分ばかり配慮して下さった。この時間が無かったら消化不良で大きな塊のまま氷解しない物体がわたしの脳という胃袋の中で漂流しつづけたろう。マードックさんが単純化しすぎたかなと討論の中で自分でも言われたけれども、講演の中でどの問題も多面的に考察されていたと、今のわたしは考えている。その多面的考察が、初めて聞いたときには互いに矛盾する言説に聞こえた原因でもあったのだが。ただし、その多面的言説が短い一回性の講演の中で容易に理解できるものでは無かったのは事実である。しかし用心深い論考は、25年を経た今日でも、聞くに足る内容を持っている。

「塊のまま氷解しない物体」と先ほど述べたが、実は、そうした「不条理なものがある」のがこの世界であり、へんな「統一体」とか「統一された概念を持つ」ことこそが、偽りの哲学、偽りの形而上

学、偽りの宗教、偽りの政治の困ったところなのだ、ヒトラー、スターリン、原爆、ベトナム戦争、テロリズムをその例にして講演されている。

ヨーロッパの中でブルジョワの生み出したリベラリズムが危機に陥っていると認識しているマードックは、ミステリーが神話と共に力を失うことを歎き、アブサードなものを内包した芸術作品こそが統一した世界観を提示しようと言う。逆に言えばそうした役割を担う作品が偉大な芸術作品であり、これまで偉大だとされてきた伝統的芸術作品でも作品によっては「脱神話化」される。「滑稽な物」や「セクシュアリティ」はなにかしらアブサードなものであり、そうした割り切れないものを内に含んだ宗教、哲学を本物とみるのである。

文学はそうした芸術なのだ。分かれば、さあ元気が出たぞと、思える話であった。

REMEMBERING IRIS MURDOCH

Neil McEwan

While I was preparing a piece on Iris Murdoch at the invitation of the Newsletter, Peter Conradi's long-awaited biography was published. This is not a review, but a recommendation of the book, combined with recollections.

One remarkable thing about Iris Murdoch, well attested in Peter Conradi's new biography (*Iris Murdoch: A Life*, Harper Collins), is the impact she made on first meeting. Many who remember her visits to Japan (1969, 1975, 1993) will agree. I was struck by the warmth of her encounters at Okayama University in 1993. 'It's her!' someone said with astonished delight as she stood outside the (to us) all too familiar buildings of the Culture Hotel. Professor Conradi quotes the novelist Hilary Mantel on the immediate strong first impression she could make: 'Her presence was so powerful that....it was almost overwhelming....She radiated a powerful benignity.' Something of this extraordinary spirit remained even when Iris's mind lay (in John Bayley's phrase) 'under the dark escort of Alzheimer's.'

Iris made many friends in Japan, as she did wherever she went. As Conradi says, jokes about her hundreds of close friends miss the point: she knew them all. I remember how she could enjoy frivolous conversation but interrupt it to speak in earnest without showing or causing any trace of embarrassment. I have recently been thinking of that authority in her voice: of how firmly she denounced terrorism

in Ireland and expressed her sorrow after the earthquake in Kobe. Her strictness of principle and unmistakable sympathy impressed friends who only met her occasionally. Peter Conradi speaks for close friends: 'Her friendship ennobled you.'

Like Peter Conradi, I discovered Murdoch novels early and remained hooked. Like him, I regard her as one of the novelists of the last century likely to go on being read by people who really like reading good novels. Unlike him, I become agitated on the subject. For example, I was annoyed, looking at reviews of his book, by critics who praise the (obviously first-rate) biography but belittle the novelist. I know it is usual after a major author's death for critics to play the devil's advocate. Why was I so irritated? Loyalty to my own idea of her work, rather than to her, might be the answer. Turning back to Conradi, who has researched every aspect of her life and work and who knows her novels better than I do, I found him a calming influence. The opposite of reviewers who hint faults and teach the rest to sneer, this biographer is scrupulous and patient, honest and thoughtful, determined to record as much as possible now and aware that, as in all literary matters, time will tell.

While he surveys his enormous cast and explores intellectual allegiances, Conradi never loses sight of the novelist. He shows how self-critical she was, and how conscious of the great novels of the past. He discusses her ambitions and achievements in terms she used herself, sharing as he does many of her ideals and beliefs, and draws on her journals to show her continual effort, amidst so many interests and commitments, to bring off a 'lucky' novel (her term), one that could speak for itself. Iris called *The Bell* a lucky one. Conradi selects others, from all periods of her work, that he argues best represent the Murdoch world 'with its own logic and its own poetry.' (Read him to find out.) Presenting her fiction in relation to her life, he puts an attractive and judicious case for rereading Iris Murdoch now and in years to come.

Of course this is a biography and not a critical study. Some readers in Japan will notice first what a long biography it is: 597 pages of text and a hundred more of notes, bibliography and index. Do not be deterred. It makes good reading and good dipping into, full of interesting connections, including one between *The Nice and the Good* and *The Tale of Genji* (cat-stealing). Some passages could be skipped. Japanese readers may be less interested in question of how Irish Iris was, here explored in great detail. Her love affairs in the 1940s make a tangled story even for Murdochians. Some figures stand out: her teacher Eduard Fraenkel, her beloved contemporary Frank Thompson, killed in action, and the 'enchanter' Elias Canetti who belongs somewhere in the background of characters such as Mischa Fox and Julius King. Those who met John Bayley in Japan, will be pleased by the portrait of Iris's husband, which is also a tribute:

In *The Black Prince* she would write, 'Writing should be like getting married. One should not make a move until one cannot believe one's luck.' Both Iris and John had been lucky. Philippa Foot saw that she had chosen one of the few men who, though outwardly easy-going and timid, was 'up to her,' who had extraordinary

hidden strengths.John both anchored and liberated her.

Let me recommend this book to all Iris's fans in Japan. It is beautifully written, and, in the fullest, Murdochian sense, a friendly biography.

Neil McEwan(Okayama University, 1990-98; Nara Women's University, 1998-2001)

第 3 回 大 会 報 告 記

駒 沢 礼 子

第3回日本アイリス・マードック学会は、10月6日(土)川崎医療福祉大で開催された。前回は地震に前々回は台風に見舞われただけに、当日の晴天に出席者全員安堵の胸をなでおろした。

午前中は福永先生の司会で総会が行われた。室谷会長はこの度の同時多発テロ事件に触れられ、解決の根本は「心」にあり今こそ文学の果たす役割は大きいと力説された。二大ホットニュースとして、マードックの伝記が映画化され12月に米、英両国で封切りになることと、ベイリー教授執筆の *Widower's House* が出版されたことを報告された。若い層の会員の輪を広げる方策として、ホームページの充実、大学図書館へのニューズレター配布、日本英文学会会場での当学会のPR促進などが理事会で話し合われたと福永先生より報告があった。また福永運営委員長退任にともない橋本先生が後任を受け継がれること、榎本先生が新しく理事に加わられたことが報告された。事務局や会計からの報告の後、総会は終了した。

午後は3題の研究発表と特別講演があった。清野婦美子先生は *Black Prince* を取り上げ、作品のモチーフになっている事柄を調べた結果を手掛かりに、愛のテーマについて発表された。作品に関連する写真を沢山見せて下さり、我々は作品に対する認識を深めることが出来た。岡本先生は、長編 *The Book and the Brotherhood* を題材にして、「偶然性」に焦点を絞って発表された。「偶然」の定義を認識した上で、人は何故「善」に徹するかの命題について述べられた。フロアより、同じテーマを持つ *Unicorn* に比べて本作品には明るいイメージがあるのは、明るさを持った話者がいるからで

はないかとの説も追加された。平井先生は、マードックの絶筆 *Jackson's Dilemma* の翻訳を終えられたばかりで、エピソードを交えながら作者の最期のメッセージを解説された。この作品に関しては作者の病気の影響が気になるところである。病気とは無関係に作品を捉えることが大切との見解や、病気の影響はあるものの作品として完成しており彼女の到達点と見なしてもよいとの意見などが目立った。

ウェンディ・中西先生は、*Under the Net* (UN) と *The Red and the Green* (RG) の比較について特別講演をされた。双方の主人公の内面的世界の対比に端を発し、夫々のテーマや文体に関する相違点・類似点を話された。途中では、UNへのサルトルの影響についてとか、RGと19世紀小説の関連などについての言及もあった。講演を聴きながら、メモを取る人や録音をする人の姿が目立った。閉会にあたり井内副会長は、研究発表・特別講演をされた先生方に賛辞と謝意を述べられ、学会は成功裡に終わった。

懇親会は橋本先生の司会でアークホテルにおいて開かれた。会長は現役の多数の学生の学会・懇親会への参加を評価され、清野茂博先生の乾杯のご発声に続き、河野、栗原両先生がスピーチをされた。暫くの懇談の後、発表、司会、講演などの大役を果たされた先生方が感想を述べられた。ワイン会社を退職された丸山先生がワイン談義をされた後、「私は世界を歩く木枯紋次郎だった」とおっしゃったのを受けて、副会長は「話のネタが尽きて私は出酒らし紋次郎」と締め括られてお披露喜になった。来年の再会を誓いつつ一同は解散した。

もう一人のもっと秘められた神

— THE BLACK PRINCE; A Celebration of Love にみる愛の讃歌 —

清野 婦美子

Iris Murdoch の *THE BLACK PRINCE* (1972年) は「愛の祭典」(*A Celebration of Love*) という副題をもっており、Shakespeare の *Hamlet* や古代ギリシャ神話の神々、アフロディテと息子のエロス、アポロと姉妹のアルテミス、あるいはアフロディテと恋人の酒神ディオニソスなどが複雑に交錯した作品である。Murdoch が1973年の対談で "I am too full of Shakespeare" と語っているように (注1)、『ブラック・プリンス』の作品にもShakespeare のソネット集や戯曲の台詞の引用が数多く使われている。Richard Toddo は暗にBlack Prince がHamlet を指していることを示唆しているが (注2)、Murdoch は1986年の対談で「私の作品の一つは「黒いプリンス」という題ですが、それはアポロ、あるいはエロスを表しています。ある神的な力ですが、不吉なもので、黒はそこから現れてきます」と語っている (注3)。芸術的傑作を目指しているが書けない58歳の作家、Bradley Pearson は友人で大衆作家Arnold Baffin の一人娘で20歳の女子大生Julian Baffin に死ぬほどの恋を感じた時、"I knew that the black Eros which had felled me was consubstantial with another and more secret god." と述べている。黒いエロスの神と同質のもう一人のもっと秘められた神とは一体何なのか。Murdoch が指摘しているように、ブラック・プリンスがアポロ、あるいはエロスを表しているとしたら、〈もう一人のもっと秘められた神〉(another and more secret god) とは、アポロ、あるいはエロス以外の神ということになる。作品中に宝石のように散りばめられた象徴的なモチーフの中で登場人物が特に大切にしていた持ち物には、〈水牛と婦人の像〉、〈卵型金めっきの嗅ぎタバコ入れ〉があり、それに呼応して、5月、薔薇、青い空、パタラの海、葡萄酒、尻、楕円形小石、鳩などの言葉のイメージは、ブラッドリーと彼の愛する母親との母子像、およびエロスとアフロディテとの母子の関係を表象し、〈もう一人のもっと秘められた神〉として、人間の根源的な母のイメージを持っている美と愛の女神、アフロディテの姿が大きく姿を現してくる。ギリシャ神話のアフロディテは春の回帰、大地に美しい愛の花を咲かせ

る女神であり、海の女神、空の女神とも伝えられている。「人生のすべては、象徴の創造に満ちている」とMurdoch が語っているように (注4)、作品中の一語一語が喚起するイメージは登場人物の微妙な心の動きを浮き彫りにし、問題の所在を知らせてくれる。

Bradley は幻想の中でJulian をアルテミスやアフロディテに神格化し、彼自身はエロス、あるいはアポロの一つの姿である葡萄酒の神、ディオニソス(バックス)の役を演じているのだと言えよう。この「愛の祭典」はBradley とJulian の愛の物語であると同時に、アフロディテをたたえる愛の讃歌であると思われる。しかし、Bradley が求めていたのが現実の世界のJulianではなく、幻想の世界の母親像だったことを悟り、Julian はパタラの別荘から夜中に消え去ってしまう。これは、オペラ「薔薇の騎士」の観劇中に、Julian がBradley に説明しているオクタヴィアンの青年のストーリーと合致している。Julian が口にしていたShakespeare の "All's Well That Ends Well" のキャッチフレーズは、Bradley がパタラの海へ回帰し、Julian はイタリアのヴェニスでかつての恋人Oscar Belling と結婚して再生していることで示されている。クラウンカアルレキーンに扮したP.ロクシャスによって幕が開けられ、再びP.L.(輝ける神アポロの異称, Phoibos Loxias)によって幕が閉じられる喜劇構成のこの小説は、Murdoch の象徴的な言葉の不思議な謎解きを楽しむうちに、〈もう一つの隠された真実〉を読者に伝えるという興味深い小説であり、*Hamlet* や古代のギリシャ神話伝説が現在の時間で生き生きと呼び戻される作品である。

※注1. 室谷 洋三: 「バブのマードック女史」, 『英語青年』, 研究社, 第119巻, 第2号, 1973年5月号, p.107. ※注2. Toddo Richard. *Iris Murdoch; The Shakespearian Interest, Vision*. London, 1979, p.30. ※注3, 4. 和田 俊, 「真実への遍歴を描く」, 『欧州知識人との対話』, 朝日新聞社, pp.51-52. ギリシャ神話伝説は以下の著書を参照; フラスリエール・R., 戸張 智雄 訳, 『愛の諸相』, 岩波書店, 1984. ボナル・アンドレ, 戸張 智雄/戸張 規子 訳。

偶然性について—『本を巡る輪舞の果てに』を通して

岡本糸美

マードックはリアリストであり、偶然性に満ちたこの世界をありのままに描き出すことが、作家としての自分の務めであると信じていた。

実際、彼女の作品にはaccidentと呼ばれる出来事が豊富に描かれ、多くの批評家がマードックの偶然性について語り、彼女の作品の主要なテーマの一つであると認めている。しかし、偶然性とは何であろうか。一口に偶然と言ってもその種類は様々であり、我々が偶然と呼ぶものの中には、人知の及ばない諸々の事象や自然現象以外にも、実は人為的な善悪の行為によって招来された、予測可能な結果としての事象も含まれている。マードックはそれらすべてを、便宜上、偶然と呼んでいるが、『本を巡る輪舞の果てに』（蛭川久康翻訳、原作名、*The Book and the Brotherhood*）の中では、「人間の業によって生れた人為的な因果」を「因果の連鎖」と表現し、人間の感情とは無関係なところで出来上がっていった、単なる原因と結果の連なりや、人知を超えた自然現象と区別したと思われる。例えば、ジーンが助けを求めて3人に電話をかけた時、その内の2人であるジェラードとローズはたまたま不在であった。これは全くの偶然であり、そこに人間の愛憎は関与していない。しかし、最後の一人であるジェンキンが在宅し、その電話に応えた結果、決闘の場に入り込みダンカンによって射殺されたのは、憎悪と嫉妬が生み出した因果の連鎖によるものだった。

マードックはキリストの神性を否定した。「絶対的なものは存在せず、現実の人間社会は偶然性に支配された予期できない事象の連続である。大切なのは、それを認識することであり、そういう社会で生きていかざるを得ない我々に出来るのは、ただ善であろうと努めることである」、と彼女は主張する。では、「善であろうと努める」には、具体的に何を求め、考え、どのように他者と関わればよいのだろうか。そして、仮にこの人間社会

が、マードックが述べるように「無意味な偶然の連続にすぎず、絶対的なものが存在しない」ならば、何のために「善であろうと努める」必要があるのだろうか。

この作品で善人として登場したジェンキンは、「愚鈍、貪欲、虚言、権力の行使、罪深い衆愚を嫌」った。彼にとっては、他者は自分とは別個の不可思議な存在であり、その神秘性を受容し、深く分析しようとはしない。争いごとや複雑な人間関係のもつれを極力避け、私利私欲を望まず、現実の生活を直視することによって、彼は周囲の人々から退屈でばっとならない男と思われてきた。しかし、彼の死によって、即ち、善を失ったことによって、初めて彼らは善に着目し、その不在の大きさに気づくことが出来たのである。ここで注目すべきなのは、「もし周囲の人間が他者に対し、ジェンキンと同じような関わり方をしていれば、彼は射殺されずに済んだ筈だ」ということである。

マードックが、「現実世界は偶然性に満ちたものであり、我々に出来ることは善であろうと努めることだ」と主張する時、彼女は「避ける種類の偶然性」即ち、「人間の業による因果」の存在を念頭に置いていたのではないだろうか。たとえ世の中の人がすべて善であろうと努めたとしても、人間の愛憎に全く関与しないところで生れる種類の因果、即ち偶然は存在し、そのために起こる予期せぬ出来事によって人は弄ばれる運命にあるのだ。しかし、もう一方の「憎悪や嫉妬によって構築される因果の連鎖」を断ち切ることが出来れば、この世界ははるかに単純で耐えやすいものになる筈である。せめて善であろうと努めることは、この種の因果の連鎖を断つ努力をすることであり、そこに絶対的存在を失った現代人の生きる道があることを、マードックは示そうとしたのではないだろうか。

Jackson's Dilemma — 翻訳を通して見えてきたもの

平井杏子

『ジャクソンのジレンマ』には、固有名詞を含むじつに夥しい量の情報が詰め込まれている。それらはまるで、オウエンの隠し部屋に詰め込まれた「カフカのベット、オドラデク」ならぬマードックのお気に入りのオドラデクという様相を呈している。作品全体が、『夏の夜の夢』を思わせる恋人の取り違えに、バックならぬ霊能者ジャクソンの参入という、比較的単純な構造であるのに引き比べ、これらの情報言語は、個々それぞれに強いメッセージを発信しつつ、マードックの心の宇宙をめぐる星のように、作品空間に配されている。

たとえばそれは、マイモニデス、エクハルト、ハイデガー、ヘルダーリン、ヘラクレイトスら思想家の名前であり、ゴヤ、オットー・ディックス、シモーヌ・マルティエーニ、ティツィアーノら画家の名前であり、キプリング、T. E. ロレンス、シェイクスピア、ジョン・クーパー・ポウイス、トルストイら文学者の名前であり、また英国をはじめ世界各地の場所の名、歴史的な言語、宗教的な言語など掬い上げれば枚挙に暇ない。作品の筋を追わずともこれらの情報を集積すれば、自ずからマードックの意図する多様な主題のいくつかが浮かび上がってくる仕掛けである。それはひとつには人間の心を蝕む過去への拘泥〈悔恨〉を断ち切ることの苦悩と困難ということ、いまひとつには人間世界に存するありとあらゆる差別の否定ということである。

しかしこれらが、作品の表層に散りばめられた言語の星であるとすれば、その星を抱く宇宙そのもののように、より広大で流麗なメッセージが作品のそこかしこに配されていることが、翻訳という、作者の呼吸ともいえる文体そのものに寄り添う作業を通して鮮明に見えてきた。あたたかく滑らかな馬の肌に触れながらブランは、「宇宙をま

るごと抱きしめているよう」だといい、ベッドで愛し合うトゥアーンとロザリンドのふたりは、「あたたかく、穏やかにたゆたう海に漂うような、眠気を誘うゆるやかなワルツを踊っているような」、「宇宙をめぐるスケートをしている」ような気持ちだという。ミルドレッドの幻影のなかではシヴァとパールヴァティのまわりを「数限りない神の創造物たちが渦を巻」き、ランダルの溺れ死んだ海の石積みは、押し寄せる波に「崩れ落ちては永遠に流転を繰り返」し、そしてリップ川の流れを見下ろすエドワードは、「先へ先へ先へと永遠に」流れに茎を引かれる芦を見つめ、「百年、千年と花をつけ」る柳草やジキタリス、マヨナラ、シモツケソウに涙を誘われる。そういえば作品のいたるところに、樹齢何百年という大木たちの澄み切った霊気が漂い、ひとびとは始終胸に手を置いては深い溜め息をつく。ここには恐らく、ヘラクレイトスの万物流転の思想や、仏教の輪廻、ギリシア的な生命の蘇り、そして戦場で撃たれて倒れ、青い空を眺める『戦争と平和』のアンドレイ公爵の思いも重なっていることだろう。永遠という時の流れに浮沈する人間のエゴの何と微少なことか。

一方先に挙げた、人間の〈知〉や〈認識〉に関わる情報は、登場人物どうしの会話や独白、議論のかたちで作中に提示されているが、そこには例外なく意見の齟齬、意味の取り違い、情報認識の過ちが取り込まれ、さらに会話の多くは、まるで言葉と言葉のあいだに軋みを生じることが目的であるかのように、短く、無味乾燥な文体で書かれている。これらのことを考え合わせれば、〈考える〉ことに発するさまざまな人間の不幸を癒やすには、宇宙の呼吸と深く息を合わせ、ひとそれぞれの祈りを祈ることである、というマードックの最期のメッセージが伝わってくる。

The French-and Irish-Connections: A Comparison of Themes in Iris Murdoch's *Under the Net* and *The Red and the Green*

Wendy Jones Nakanishi

Under the Net (1954) and *The Red and the Green* (1964) vary so greatly in form and content that it scarcely seems credible that they can have been penned by the same author. While the first is an experimental work, analyzing both by its subject matter and its style existentialist themes as espoused by Sartre, the latter novel, published ten years afterwards, can seem oddly regressive in contrast, harkening back to the old certainties of the nineteenth-century novel with its omniscient narrator and conventional plot. And yet, although the novels appear widely dissimilar, they are linked by many of the same preoccupations, and it becomes apparent that the differences between them are superficial and unimportant. It also becomes clear that Murdoch was an experimenter with the novel genre, anxious to find the 'voice' and manner which would most suit her purpose as a writer.

It is no accident that *Under the Net* was published only one year after Murdoch's acclaimed study of Sartre, which concluded with her complaint that Sartre's "inability to write a great novel is a tragic symptom of a situation which afflicts us all." In *Under the Net* in particular and, arguably, in all her subsequent novels Murdoch sought to remedy that deficiency.

In an essay entitled "Against Dryness," Murdoch identified the Sartrean perception of the human being as a solitary individual who is 'totally free.' It was a perception with which Murdoch agreed, although she was to differ with Sartre in the manner of that representation of the human in the novel. In *Under the Net* a character complains that "all theorizing is flight." Murdoch agreed, believing that Sartre's concern with 'essences' rather than 'materiality' in his fiction denied it of the ability to convey the "truth" of life: its messiness and the concrete particularity of reality. As a novelist Murdoch was determined to include that "truth" and to accord it its due importance.

Inevitably, there are autobiographical echoes in both novels, especially in the ambivalence characters in each feel towards their Irish inheritance. But the most important common theme of *Under the Net* and *The Red and the Green* concerns human alienation and isolation. Both depict worlds of well-intentioned strangers who only delude themselves with the illusion of meaningful intimacy with others. Comic self-delusion sets the tone of both works, which revolve around one of Murdoch's central preoccupations as both a novelist and a philosopher: the relationship between man's inner world of thoughts, dreams and desires and the external world which impinges upon the purely personal.

Murdoch once observed that "Goodness is a form of realism" which prevents us from "living in a private dream world." Virtue is the recognition of the "other": the realization that other people exist and inhabit their own realities, and that other worlds exist, independent of our own hopes and wishes. This interpretation of "goodness" is one recognized by only a few of her characters, and which is achieved by even fewer.

Under the Net Revisited

榎本 眞理子

今度のマードック学会でWendy中西先生が講義で扱ってくれた一つが*Under the Net*だった。ちょうど読み直していたところだったので嬉しくなった。再読して新たな発見がいくつかあった。わけても一番大きいことはhappy playfulnessとでも名付けたいようなそのみずみずしい躍動感であった。マードックは実に楽しそうに書いている。私にとってこの小説はマードックの他の作品とは毛色の違う、独特の魅力を持つものとして記憶の中に存在し続けていた。その謎が解けた気がした。批評家の中でもL.R.Leavisは『網の中』をマードックの最高の作品と評しているというが、それも幾分上述のことに関係があるのかも知れない。それはしかし次の『魅惑者から逃れて』では(全くとは言わないまでも)かなり影を潜め、最後のいくつかの作品に再び形を変えて現れているように思われるがどうだろうか。

四半世紀ぶりの再読で改めて気づいたことのもう一つは犬のマーズの存在である。マードックの小説には随所に人との交流の可能な「善」なる存在として動物が登場する。それらの動物はまた往々にして主要人物に何らかの気づきのきっかけを与える。その片鱗はすでに賢い俳優犬であるマーズのうちにそれと見て取れる。

錯視の効果もうまく使われている。その一つは後半に現れる撮影所のシーンである。芝居や演劇のセットは本物そっくりに見えながら本物ではない、バーチャルリアリティの面白さを持つ。人間は騙されたがる一面を持つものだから、そのセットがドイツ表現主義のような超現実的なものであろうと、至って「リアル」なものであろうと、見ているうちに「本物」に見えて来る。あるいは「本物」と見なすように自分の認識を丸め込む。

ジェイクの紛れこんだ撮影所では目を射る照明であたりが煌々と照らされている。誰かが演説を

して、大勢の群衆がそれに耳を傾けている。撮影が続行中で、キケロの時代の陰謀家カティリナ役の俳優がローマの市民を扇動している場面らしい。ところが次の瞬間ジェイクは喋っているのは左翼運動家のレフティで、聴衆の大半は仕事着姿の技術者だと気づく。演説者は「資本主義を取り除く道は」と言っているし、「社会主義の可能性」と書かれたのぼりが見える。そしてそのときジェイクは探していたヒューゴを見つけるのだ。

この場面では古代ローマと20世紀のロンドンが一瞬にして交錯するような目眩に似た気分を読者は味わわれる。人は見えることによって物事を知るが、またその同じ「見える」ことによって現実を認識しそこないもする。ジェイクの見つけたヒューゴは「さまざまな角度から発する光で」陰がない。ジェイクは始め何も彼に言わない。「厳粛さと悲哀の感情がペールのように二人の間におりて、一瞬、自分の姿が彼に見えるのだということを殆ど感じもしなかった。それほど一心に彼を見つめていた」のである。言葉ではなくむしろ熱心に注がれるまなざし。それこそが大切なのかもしれない。そのことを現代文明の偉大な発明の一つ、映画の撮影所を使ってマードックは巧みに伝えている。

もう一度『網の中』に戻ろう。この小説の魅力の一つはティンカム夫人の居心地のいいタバコ屋だ。ロンドンのどこかにきっとああいうところがあるはずだと私は本気で思っている。ロンドンの街はまた最後にヒューゴが姿を消す不可解な魅力に満ちた場所でもある。前からやってみたくも思っていることがある。『網の中』を始めとするマードックの小説の数々に現れたロンドンを拾い出してみる、その中で迷子になってみることだ。ベンヤミンのパスージュならぬマードックのロンドンは、そのとき一体私に何をかいま見させてくれるだろうか。

事務局よりのお知らせ

第4回大会について

2002年10月5日(土) 川崎医療福祉大学にて開催。研究発表、特別講演、懇親会など計画しています。特別講演など詳細については、後日各会員に連絡します。

下記の要領で第4回研究発表会の発表者を募集します。発表テーマに発表要旨(日本語の場合は1200字程度、英語の場合は400words程度)を添えてお申し込みください。

応募資格：日本アイリス・マードック学会会員

発表時間：発表25分、質疑応答5分

締切日：2002年6月末日

申し込み：発表者の氏名、所属、住所、電話を明記して

〒701-0193

倉敷市松島288 川崎医療福祉大学
橋本信子研究室

日本アイリス・マードック学会 まで

会計報告

総会で報告し承認された2000年度会計の収支決算をお知らせします。収入は年会費140,000円、懇親会費133,000円、寄付10,000円、前年度繰越金125,932円と利子17円で合計408,949円でした。支出はニューズレター刊行費24,150円、研究発表会・総会・懇親会運営費196,736円、通信費18,800円、消耗品費等2,331円で合計242,017円でした。したがって残金は166,932円でした。残金は次年度繰越金としました。

なお、会費未払いの方は、速やかにお納めいただきますようお願いいたします。

会計 小野 順子

マードック関連著作情報

Bayley, John.

Widower's House. Duckworth, 2001

Conradi, Peter.

Iris Murdoch: A Life. Harper Collins, 2001

Murdoch, Iris.

Something Special. Chatto & Windus, 1999

榎本真理子「理想の女への憧憬—アイリス・マードック『海よ、海』—『イギリス小説のモンスターたち』彩流社、2001年。

榎本真理子「もう一つの白鳥の歌—*The Green Knight*を読む—『恵泉女学園大学人文学部紀要』第13号、2001年。

原稿募集について

マードック作品研究にまつわる秘話とか逸話や、彼女の人間像に関するものなら何でも結構ですので、ふるってご投稿下さい。幅広い層からのエッセイにより、本誌が皆様方の意見交換の場になるよう願っています。

本文：1600字程度で、でき得る限りワープロで原稿作成の上、原稿とフロッピー (MS-DOS ファイルに変換したもの)を提出

締め切り：2002年10月31日

送先：〒709-0802

岡山県赤磐郡山陽町桜ヶ丘西6-10-6
福永信哲

編集後記

今回の学会も皆様のお陰で実り多いものとなり、喜ばしい限りです。三度目の集まりとなると、お馴染みの方も増えてお互いの垣根を取り払った情報交換が出来たとの声も聞こえました。この感激を一刻も早くお届けしたい一心でニューズレター第3号を編集しました。

編集に当たっては、届けられたフロッピーを当方のパソコンに取り込み、本誌の書式になるように操作するのですが、原稿の一字一句と対面していると、まるで執筆の先生の息遣いにまで触れているような感覚に陥り、編集者冥利に尽きると言うのが正直な感想です。

会員諸氏の自由な投稿で本誌が益々充実するよう願っております。(R.K.)

The Iris Murdoch Newsletter of Japan

No. 3

発行者 日本アイリス・マードック学会

代表 室谷洋三

編集 福永信哲 駒沢礼子

事務局 川崎医療福祉大学 橋本信子研究室

〒701-0193 倉敷市松島288

Tel 086-462-1111 Fax 086-464-1109